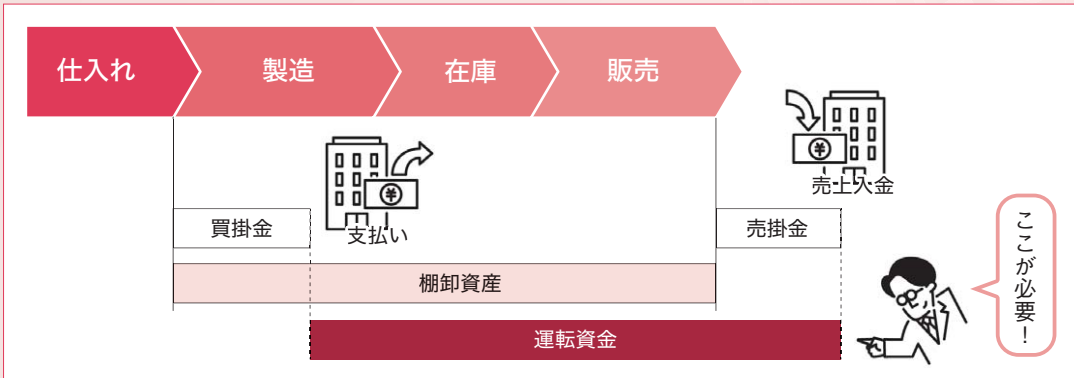


図表1 運転資金とは



ここが必要!

図表2 貸借対照表を用いた経常運転資金の算出例

【下記はA社の貸借対照表（一部）】

(単位：百万円)

流動資産	流動負債
売上債権 45… <sup>①</sup>	仕入債務 30… <sup>②</sup>
受取手形 15	支払手形 10
売掛金 30	買掛金 20
商品（棚卸資産） 25… <sup>③</sup>	：
：	固定負債
：	：
固定資産	純資産
：	：

経常運転資金

①売上債権 4500万円 + ③棚卸資産 2500万円  
 - ②仕入債務 3000万円 = 経常運転資金 4000万円

※回転期間を活用した算出方法は以下のとおり

経常運転資金 =

平均月商 × {売上債権回転期間(売上債権÷平均月商)  
 +棚卸資産回転期間(棚卸資産÷平均月商) - 仕入債務回転期間(仕入債務÷月商)}

1. 経常運転資金

経常運転資金とは、事業を継続していくために恒常的に必要となる資金のことだ。その金額は、「①売上

債権 + ②棚卸資産 - ③仕入債務」で計算できる。企業の決算書の貸借対照表と照らし合わせて、実際に計算してみよ

計算方法や種類が分かる!

# 運転資金融資の仕組みを理解しよう

運転資金の種類ごとに、その性質や適正な融資金額の算出方法などの基本を解説する。

運転資金とは、ひと言でいうと「企業が事業を行っていくために必要な諸々の支払いに充てる資金」のことである。

例えば、原材料や商品の仕入れ費用が目的として挙げられる。卸売業・小売業では、商品を販売するために、先に商品を仕入れなければならない。製造業では、製品を製造するためにまずは材料を仕入れなければならない。自社で製造できない部分は外注することも多い。また事業を行うにあたり、人件費、事務所・店舗・工場等の家賃、水道代・電気代などの経費も必要である。

これらの事業運営に必要な諸経費は、売上の入金よりも先に支払う必要が出てくる。しかし、すべてを自己資金で賄える企業は少ない。そこで多くの企業は、金融機関からの融資で運転資金を工面

資金使途ごとの性質や算出方法をつかもう

運転資金でよくみられる資金使途には、経常運転資金・増加運転資金のほか、つなぎ資金・納税資金・賞与資金・季節資金・ハネ資金がある。企業が各運転資金を必要とする理由（資金ニーズ）、融資の方法や返済条件、返済原資をそれぞれ解説する。

金融機関の担当者としては、企業に対するヒアリングで運転資金のニーズを拾い上げて融資を提案することで、より多くの案件を獲得したいところだ。また稟議書を作成する際に審査を通しやすくするためには、運転資金が必要となる理由を理論立てて書くことが重要である。まずは運転資金の背景や、その融資の仕組みを理解することから始めよう。

う（図表2）。なお、回転期間から算出する方法もある。こちらのほうがより正確な金額を求められるので、覚えておくとうい。

①売上債権（売掛金 + 受取手形） + ②棚卸資産（商品・製品等）

貸借対照表で表示される売掛金・受取手形・棚卸資産は、現金として回収する前の、「企業が立て替えている金額」を示す。商品等を販売するには、まず在庫（棚卸資産）を持つ必要がある。小売業等を除いて、販売した後で売上をすぐに現金で回収できる場合は少なく、後払いの売掛金となる。売掛金の入金を受取手形で行われることもある。売掛金や受取手形の売上債権があるうちは、企業に現金は入ってこない。

③仕入債務（買掛金 + 支払手形）

一方で買掛金や支払手形